



TITLE:

# 高齢者生涯教育における図書館の 役割(京都大学生涯教育学講座シニ アキャンパス実施記念号)

AUTHOR(S):

高島, 涼子

---

CITATION:

高島, 涼子. 高齢者生涯教育における図書館の役割(京都大学生涯教育学講座シニアキャンパス実施記念号). 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究 2005, 4: 195-202

ISSUE DATE:

2005-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/43865>

RIGHT:

## 高齢者生涯教育における図書館の役割

高 島 涼 子

The Role of Public Libraries in Gerontological Education

Ryoko TAKASHIMA

### 抄 録

高齢者の生涯学習の意義は近年ますます重要視されている。こうした環境の中で公立図書館が高齢者に対して果たす役割について考えていく。高齢者にとって最も近隣の学習施設である図書館が、高齢者人口の未曾有の増加に対応して、提供すべき図書館サービスについて述べる。  
キーワード：the aging, gerontological education, library services

### はじめに

65歳以上人口は特に1960年代以降世界的規模で増加し続けている。世界的には60歳以上人口の総人口に対する比率は、1950年 8.1%、2000年 10.0%と増加し、2050年には22.1%と推計されている<sup>1)</sup>。日本では、2003年9月現在65歳以上人口は推計で2431万人、総人口12769万人の19%を占めている<sup>2)</sup>。1970年に総人口に対する比率が7%を超えてから25年後の1995年に14%に達し、先進諸国間では最も短時間に14%を超えた。その結果、医療費の増大、介護体制の不備、年金制度の不備といった問題が起き、その対応を迫られている。介護を必要としている人々が増加すると同様に健康な高齢者も増加し、この人々への退職後の時間の手当ても求められている。こうした高齢者人口の増加は高齢者に対する考えを変化させた。社会の重荷とする見方や世代交代の結果社会の第一線から退いた無用の存在という見方から、社会の有用で貴重な人的資源とする見方やそれぞれの人生のステージで人は成長を続けるという見方へと変化させた。

高齢者に対する見方、つまり高齢者観の変化は高齢者の生涯学習の必要性を認識させたといえる。生涯学習に関する機関や施設は多くあるが、公立図書館は生涯学習の近隣に位置する機関である<sup>3)</sup>。本稿はこの公立図書館がますます重要視されている生涯学習においてどのような役割を果たしているか、また果たすように望まれているかについて、主に日本とアメリカ合衆国における公立図書館の高齢者サービスについて、述べるものである。

### 1 公立図書館の機能

#### 1.1 日本の場合

日本における公立図書館の機能は資料の提供である。日本において公立図書館が住民に身近に存在し始めたのが1970年代である。1970年代初頭の図書館数は1千館未満であった。その後図書館数は約3倍、蔵書数は約10倍、職員数は2倍強となり、貸出冊数は16倍以上の伸びを示

し<sup>4)</sup>、現在までの30年間あまりで画期的な発展を遂げた。しかしもともと図書館サービスの進んでいる国と比べると低いレベルからのスタートであり、現在も課題は多くある。それらの課題を考慮すると日本の図書館の機能は資料の提供という図書館の機能の最も基本的な部分にならざるを得ない。

課題の一つは町村立図書館設置率が50%未満という点や分館網の未整備のため、図書館が近隣に存在しない地域があるということである。市立図書館はほぼ100%設置されているので、町村立との差が大きい。町村は都市部に比べると高齢化の速度が速く、65歳以上人口の比率が25%を超えている町村も多い<sup>5)</sup>ことを考えると、この低い設置率は大きな課題となる。また、市立図書館の設置率はほぼ100%であるが、分館やBMによる図書館システムを形成している自治体は大都市に多く、中小の都市、町や村では分館網は整備されていない図書館が多い<sup>6)</sup>。図書館は設置されていても身近になれば存在しないのと同じである。公立図書館が近隣にあるとはいえない地域が存在しているのである。

また、高齢者は図書館を利用しない、とか、高齢者は本を読まないといった既成概念が社会一般に受け入れられていることも課題の一つである。高齢者は知的、身体的、また精神的に衰えるものだとする既成概念であるが、この考えこそ高齢者の生涯学習にとって、また図書館の高齢者の利用にとって最大の障壁である。

日本の図書館界全体としても高齢者サービスに取り組んでいるとはいいがたい。日本図書館協会には図書館の利用に障害がある人々へのサービスについて活動しているセクションがあるが、高齢者サービスはほとんど取り上げられていない。1998年に実施された図書館の利用に障害のある人々へのサービス調査報告書<sup>7)</sup>では、「刊行にあたって」の項で高齢者サービスについて触れられているのみで、調査対象と捉えられてはおらず、サービスも調査されていない。そしてこれ以降新たな調査は行われていない。後に述べるアメリカ図書館協会のようにガイドラインの作成なども行っていない。

こうした状況では特に施設入所者やホーム・バウンドの人々にとっては図書館を利用するのが困難となる。高齢者サービスを提供している公立図書館は少ない。大阪市立中央図書館、東京都墨田区立緑図書館、藤沢市市民総合図書館、枚方市立図書館、斐川町立図書館（島根県）などがインターネットで高齢者サービスについてアクセス可能な図書館である。サービス内容は郵送サービスや宅配サービスが主なものである。このサービスは障害者サービスに含まれている場合もあり、図書館界全体として高齢者サービスについての関心は低いといわざるを得ない。高齢者にとって最も身近な生涯学習機関としての認識度も低い。

## 1.2 アメリカ合衆国の場合

アメリカ合衆国の図書館界はその成立当初から「すべての人々に」(*to all*) をモットーとして掲げ、その実現に向けて多大な努力を払ってきた。1960年代の社会の変動に対応した図書館界の取り組みはこのモットーを現実のものにしようとする試みであったし、近年のコンピュータの発達、インターネットの普及は図書館界にとって新たな挑戦となっている。こうしたアメリカ合衆国における公立図書館の機能は、資料や情報の提供を前提として、あらゆる階層、人

種、年齢、性、に固有なニーズに応えることといえる。

アメリカ合衆国における高齢者サービスには資料提供やレファレンス・サービスは含まれない。それらは当然のこととして提供されているのである。その上で、高齢者を対象とした、あるいは高齢者にサービスする機関で働いている人々を対象としたプログラムやサービスを高齢者サービスとしている。この点が日本との大きな差異である。

アメリカ図書館協会（American Library Association: ALA）は1964年、「高齢者への図書館の責務」“The Library’s Responsibility to the Aging”を採択し、高齢者に関わるALAの見解を明らかにした。その後1971年と1981年に改訂している。これを高齢者への図書館サービスの理念として、この理念に基づく実際の活動についてのガイドライン“Guidelines for Library Services to an Aging Population”を1975年に作成した。このガイドラインは1987年、1999年に改訂されている。1987年改訂ではタイトルを“Guidelines for Library Service to Older Adults”と変更し、内容も全面的に改訂された。1999年の改訂は1992年の障害者法Disabilities Actの成立とコンピュータの普及が主たる原因であった。名称も“Library Service to Older Adults Guidelines”と変更された<sup>8)</sup>。

個々の図書館では、地域のニーズに対応したサービスが提供されている。施設への資料の提供、宅配、特別プログラムが主な内容である。特別プログラムには読書会、コンピュータ講習、回想プログラム、音読会、詩作教室、コンサートなどがある。また移民の多い地域では母語による資料の提供やプログラムが行われている。

## 2 高齢者の持つ固有のニーズ

### 2.1 身体的なニーズ

まず視力の衰えが挙げられる。通常45～50才の間に老眼が始まり、年齢と共に進行する。老眼は小さな文字や明暗の対照がはっきりしない文字が読みにくくなる症状で、現在の社会状況では、老眼鏡をかけない限り支障をきたす場合が多い。また、70歳を超えると白内障にかかる場合も多くなる。

年を重ねるに連れて、慢性の病気にかかりやすく、また介護を必要とするケースも増加する。明確な病名はつかなくても全般的に健康や体力が衰えることは否定できない。高齢者にとって健康は最大の関心事といえる。このような身体的な変化はそれまでの生活形態を変化させる。これまで可能であった車の運転や公共交通機関の利用を不可能にさせたり、介助者を必要としたりする。こうした状況にあっても従来の生活を維持するために必要な支援が高齢者の身体的ニーズといえる。老眼に合わせた表示方法が標準となるなら、より若い世代にもその表示は読みやすいものとなる。移動手段については戸口から戸口までの方法が実現すればどんな人々にとっても便利な移動方法となる。

### 2.2 精神的なニーズ

現代社会において、人は退職後平均寿命からいえば20年ほどの自由な時間を持つようになった。現役時代の責任や義務から解放されて、現役時代にはできなかった自分らしさや自己実現

を求める人々や主体性を確立しようとする人々が増加している。高齢者を対象としたさまざまな学習プログラムの増加がその証といえる。

発達心理学の分野における老年期のアイデンティティに関する研究はいまだ数少ないが<sup>9)</sup>、その中で代表的なものとして、E. H. エリクソンの『老年期——生き生きしたかわり』があげられる。この中で生涯発達における高齢者の精神的ニーズとして、自我の統合、あるいは人生と死の受容という課題があるとエリクソンはいう。この課題に取り組むためにライフ・レビュー(人生の回想)という方法がある。「人生の回想は、自分の生涯にわたる連続性とアイデンティティを確認し、人生(自我)の統合のために重要な役割を果たすものである<sup>10)</sup>。」

また、教育老年学の分野での高齢者の教育的ニーズに関する研究ではハワード・マクラスキー(Howard Yale McClusky)のものがある。マクラスキーは教育的ニーズとして次の4点を挙げる。

1. 対応するニーズ Coping Needs; 現実に対応していく最低限のニーズ
2. 自己実現のニーズ Expressive Needs; 人生の後半に表現力が開放される。
3. 貢献するニーズ Contributive Needs; 奉仕への欲求。但し無報酬である必要はない。
4. 影響を及ぼすニーズ Influence Needs; 影響力は弱まるかもしれないが無力ではない<sup>11)</sup>。

このようなニーズは高齢者特有のニーズとは言えず、青年期や壮年期のニーズとも共通しているが、高齢者の場合はその前提に死期が近づきつつあるという事実があり、この前提に基づいてのニーズという点で他の年代層とは異なる、高齢者固有のニーズと言い得る。これらのニーズに対応するプログラムは現在日本では生涯学習施設を中心に提供されている。ボランティア活動も活発になり、高齢者の雇用についても自治体によって組織化されるようになった。

しかし、図書館界との関わりについては、発展の余地が多くあるといわざるを得ない。図書館界が高齢者の教育的ニーズや知的ニーズに関心を持っているとはいいいがたいし、発達心理学や教育老年学における研究成果をサービスに反映させているともいえないからである。それではこうしたニーズに対応する図書館の役割とはどのようなものであるのだろうか。

### 3 図書館の役割

#### 3.1 資料の提供

高齢者はその健康の度合いによって居住場所が多様となる。健康であれば自宅に住み続けることが可能である。また多少介護が必要であったり、寝たきりであったとしても介護者と必要な設備があれば自宅で居住できる。一方そういった環境にない人々や介護の度合いが重い人々は施設が居住場所となる。図書館はあらゆる居住状況また健康状況にある人々に資料提供の責務を負っている。サービス対象地域内に暮らす高齢者にサービスを提供する責務を負っている<sup>12)</sup>。この責務を実践するために、まず高齢者の居住状況を把握し、次にその健康状況にあわせた、また読書ニーズに対応した資料が用意されなければならない。

高齢者に必要な資料の第一は大活字本や録音図書・雑誌である。欧米に見られる通常の活字の大きさの図書と大活字本が同時に出版される形がもっとも望ましいが、日本ではまだ実現されていない。政府補助という形で早急に実現が望まれる課題である。また、電子資料も高齢者

にとって、在宅のまま資料や情報が入手できるという点で、有効な資料となり得る。

すべての利用者に資料を提供することは図書館の責務であるが、特に高齢者には利用者から求められる資料だけではなく、潜在的なニーズにも応えることによって資料の提供がなされる。高齢者の読書歴、生活歴、教育歴、健康状態によるニーズに対応した資料提供がなされるべきである。

資料提供には高齢者の場合入手方法を来館のみとはできない。図書館が資料を高齢者に届ける方法が必要となる。郵送、宅配、そしてBMが考えられる。しかし、可能ならば蔵書全体にアクセス可能とするため、何らかの方法で来館することが望ましいので、その方法を講じることも求められる。図書館の分館網が整備されていて誰でもが歩いていける図書館システムも必要である。

### 3.2 機会の提供

高齢者のニーズに応えるプログラムや講座、大学などの教育機関との連携が求められる。生涯学習プログラムはさまざまな形で提供されているが、そうしたプログラムと図書館が関わりを持つことによって、図書館が学習の機会を提供できるようになる。図書館自身がプログラムを提供する場合と、他機関のプログラムを支援する場合とがある。生涯学習施設間の連携がより緊密になされれば、多様なプログラムの実施が可能となる。それぞれの文化や風土にあったプログラムの計画及び提供が求められる。

具体的なプログラムの例としては、

\* ホーダランド・カウンティ・ライブラリー（ノルウェー）「高齢者のための文章創作」

Hordaland County Library, Bergen, Norway “Aging and Verbal Creativity”

基本的な文章作成技法を、詩、俳句、短編、エッセイなどを書くことによって習得するプログラムで、これについては2002年 IFLA グラスゴー大会で報告がなされた。参加者の一人が創作した詩に以下のようなものがある。

あなたは近所に住んでいる  
通りを歩いているが、誰もあなたを目に留めない  
あなたは自分の用事を静かにすませる  
あなたのコートは灰色で  
流行のスタイルではない。  
あなたは「灰色のねずみ」

さて、あなたは本当にそうなのか  
おそらく色とりどりの思い出を持ち  
内面は生き生きした期待で満たされているのだろう  
おそらくあなたは誰も開こうとしない  
破れた灰色のカバーがかかっている  
色彩豊かな一冊の本なのだろう。<sup>13</sup>

- \* ビューリガード区図書館（アメリカ合衆国、ルイジアナ州）「高齢者アウトリーチ・サービス」 Beauregard Parish Library, DeRidder, Louisiana “Senior Outreach Service”

学習及び娯楽プログラムで、図書、ゲーム、歌などを高齢者が集まる場所で提供する。

- \* ブルックリン公立図書館（アメリカ合衆国、ニューヨーク州）「高齢者への図書館サービス」 Brooklyn Public Library, Brroklyn, New York “Services to the Aging”

もっとも特徴として挙げられるのはシニア・アシスタントの存在で、特別プログラムの企画、運営、実施を担当している。彼らはわずかではあるが報酬を得て働いているボランティアで、同世代の人々へのサービスに直接関与している。高齢者サービスを発展させる最善の方法は高齢者自身がサービスを担当することである。高齢者の固有のニーズを認識するのに高齢者以上に最適な人々はいない。他に施設への資料提供などを実施している。

などがある<sup>14)</sup>。

### 3.3 課 題

#### \* 司書の意識改革

1970年代に執筆された博士論文によれば、司書の老いに対する見解や高齢者に対する態度は社会一般のそれらと全く一致するという。公立図書館において高齢者は拒否された利用者であり、よくても彼らのニーズは一般成人に組み込まれていて、高齢者サービスとして分離されることはなかった、高齢者サービスを決定づけるのは司書の高齢者に対する姿勢であるというのがこの論文の結論である<sup>15)</sup>。

アメリカ社会において高齢者は、無力ですべてを失う存在とみなされていた。社会的地位、経済力、健康、家族、友人、さまざまな能力を失っていく存在とみなされていた。また、すべての変化を嫌う、社会の進歩という観点からすれば妨害となる危険な存在とみなされていた。高齢者への図書館サービスもこうした考えに立脚して提供されていた。図書館が提供する生涯学習プログラムは恩恵や指導であって、ニーズに応えるという観点からではなかった<sup>16)</sup>。

アメリカ合衆国における高齢者サービスはこの1970年代以降、高齢者のニーズに立脚したサービスを提供していくようになる。その契機となったのが、高齢化に関するホワイトハウス会議であり、老年学界での研究成果であり、マイノリティの発言力の増大であり、高齢者を対象とした法律や制度の制定であった。これらが総合して、高齢者に対する認識を変化させていったのである。

こうした社会の高齢者観の変化に対応したサービスを提供する司書は、高齢者をサービスの客体としてではなく、サービスの主体として捉えることが求められている。恩恵を受ける社会的弱者ではなく、社会に有用な経験と知恵を持つ人的資源として図書館は高齢者にサービスを提供するのである。

2004年の現在、単独では自立し得ない人々が他からの介助を受けながら、しかしあくまで自己決定権は保持することが可能となり始めた。これまで弱者や病人として哀れみの対象でしかなかった人々が、パターンリズムから脱却して、自らをサービスの主体とみなした時、高齢者

のニーズの多くが満たされるのである。こうした考え方がようやくなされるようになったのである<sup>17)</sup>。

司書にもこうした意識の改革が求められている。従来の既成概念にとらわれたまま、高齢者をサービスの客体、哀れむべき存在、あるいは社会にとって無用の存在とみなしている間は高齢者のニーズに対応することはできないのである。

#### \*設備の充実

高齢者に使いやすい、アプローチしやすい設備が高齢者サービスには不可欠である。そして高齢者にとって使いやすい設備であれば、誰にとっても使いやすい設備となる。段差がなくスロープとなっていれば、照明が明るく文字が大きく明暗がはっきりしていれば、車椅子のために書架と書架の間隔が広く書架が低ければ、資料の文字が大きければ、階段の手すりが両側にあれば、スイッチやドアノブや手洗いの設備が使いやすいければ、高齢者のみならず、すべての人々にとって使いやすい図書館となる。

1980年代から始まったユニバーサル・デザインを図書館も採用して、すべての年齢層の人々が使いやすい設備を創出しなければならない。ユニバーサル・デザインは「すべての人間の真の平等を認めるデザイン」<sup>18)</sup>である。

#### 注

- 1) *Long Range World Population Projections: Based on the 1998 Revision*. The Population Division, Department of Economic and Social Affairs, United Nations Secretariat. <http://www.un.org/esa/socdeu/ageing/agewpop1.htm> 2004年5月6日アクセス
- 2) 総務省統計局ホームページ 国立社会保健・人口問題研究所「推計人口」<http://www.stat.go.jp/data/topics/topics051.htm> 2004年5月6日アクセス
- 3) South, Jean-Anne and Drennan, Henry, "The 1971 White House Conference on Aging: Implications for Library Services," *Library Trends*, vol. 21, no. 3, January 1973. p. 451.
- 4) 『日本の図書館 統計と名簿 2003』日本図書館協会 2004年 p. 27
- 5) 内閣府編『高齢社会白書』平成16年版 「暮らしと社会」シリーズ ぎょうせい 2004年 pp. 5-6
- 6) 『日本の図書館 統計と名簿 2003』日本図書館協会 2004年 p. 26
- 7) 日本図書館協会障害者サービス委員会『図書館が変わる——1998年公共図書館の利用に障害のある人々へのサービス調査報告書』日本図書館協会 2001年 p. 3
- 8) A L A ホームページ [http://www.ala.org/rusa/stnd\\_older.htm/](http://www.ala.org/rusa/stnd_older.htm/) 2004年6月7日アクセス
- 9) 岡本祐子編著『アイデンティティ生涯発達論の射程』ミネルヴァ書房 2002年 p. 260
- 10) 同上 p. 262
- 11) *1971 White House Conference on Aging; Education Background*, by Howard Y. McClusky. Washington, D.C., White House Conference on Aging. February 1971.
- 12) "The Library's Responsibility to the Aging," prepared by the Library Service to an Aging Population Committee, Reference and Adult Services Division, American Library Association. (Adopted January 1964, and revised July 1970 and October 1971 by the Adult Services Division, American Library Association. Revised June 1981 by the Reference and Adult Services Division, American Library Association.)
- 13) Synnes, Oddgeir, "Aging and Vervel Creativity - Creative Writing for Elderly in the Library,"



- Libraries Serving Disadvantaged Persons, 68<sup>th</sup> IFLA Council and General Conference August 18-24, 2002.
- 14) Mates, Barbara T. *5-Star Programming and Services for Your 55+ Library Customers*. Chicago, American Library Association, 2003, pp. 121-148.
- 15) Kanner, Elliot El. *The Impact of Gerontological Concepts on Principles of Librarianship*, The University of Wisconsin, Ph. D., 1972. p. 93, 108, 112.
- 16) Butler, Robert N., *Why Survive?: Being Old in America*. New York, Harper & Row, c1975. pp. 4, 9, 370.
- 17) 上野千鶴子、中西庄司『当事者主権』岩波新書860 岩波書店 2003年
- 18) 野村雅一編著『老いのデザイン』求龍堂 2003年 p. 30.